論　文

青年期の自我状態
―自我発達上の危機状態尺度とバウムテストとの関係―

井村　成美・西村　喜文[1]

（西九州大学大学院　健康福祉学研究科，[1]西九州大学）

（平成24年11月５日受理）

Ego States during Adolescence-relationship between the ego development crisis state scale and baum Test

Narumi IMURA and Yoshifumi NISHIMURA[1]

Nishikyushu University Graduate School，[1]*Nishikyushu University*

（Accepted: November 5，2012）

Abstract

This study discusses the connections between ego development crisis states and self-image in first -and fourth-year university students, using the “Adolescence Ego Development Crisis State Scale” and the “Baum Test.” The results of the Crisis State Scale showed that fourth-year students displayed crisis states the strongest. Furthermore, a significant difference was shown between fourth-year female students as compared to fourth-year male students; in that the female students displayed deficiencies in decisiveness and ability to achieve, as well as identity diffusion. However, no significant differences were found between females and males among the first-year students. Also, when looking at the connections between the Crisis State Scale and Baum Test, strong correlations in the Baum test were seen in the first-year male students. When considering the characteristics of ego states of university students in light of these findings, fourth-year students have higher crisis states compared to first-year students because they are in a period of pressure to choose their future. Fourth-year female students, in particular, feel mental and physical fatigue. Also, first-year students were shown to have anxiety and conflict regarding their relationship with friends. This shows that even in adolescence, the content of the crisis states differs based on the conditions and environment an individual is in, and identity is established by gradually overcoming these crises.

キーワード：青年期の発達課題と危機状態、バウムテスト、大学生の自我状態の特徴

Keywords：Ego development crisis state, developmental tasks for adolescents, Baum test, characteristics of ego states of university students

Ⅰ．問題と目的

人間の心が成長・発達をしていく為には、その時期に迎える発達課題を段階的に達成する必要があるとされている。

エリクソン（Erikson, E. H.）はフロイト（Freud, S）の心理・性的発達理論をもとに、対人関係や人格発達に焦点を当てた心理・社会的発達理論を提唱し、そして人生をライフサイクルという視点から８つの節目（発達段階）に分けた。そしてその中で青年期の発達課題は「自我同一性の確立（ego identity）」対「自我同一性の拡散（identity diffusion）」としている。[1−2]青年期は子どもから大人への移行期、狭間の時期であり、「自分とは何者であるか」[3]と、自分なりの答えを求めて大いに悩みと格闘する時期とされている。また、青年期は「自分探し」の時期であるとともに、親から独立し、様々な葛藤や不安を乗り越えることにより、心理的・社会的にも自立し、次のプロセスへと進むことができる時期とされている[2]。

青木省三（2005）は、青年期の居場所について「家族を感じる場」「自分を感じる場」「仲間を感じる場」[4]の３つを掲げ、この３つの時と場を往来しながら成長していくと述べている。また、長尾（2005）は「青年期は児童期から成人期へと自我が発達していく過渡期である」と述べ、この青年期の過渡期を「青年期の危機」（adolescence crisis）ということが多いとしている[5]。このように、青年期では、自立に伴い様々な不安が生じており、自我同一性の確立は容易ではないとされている。さらに、長尾（2005）は、中学生を対象に自我発達上の危機状態について検討しており、自己イメージとの関連があることも示唆している[5]。

そこで、本研究では、大学１年生と４年生を対象に、自我発達上の危機状態と自己イメージの関連について、「青年期の自我発達上の危機状態尺度」と「バウムテスト」を用いて、その関連性について論考する。

Ⅱ．方法と手続き

１．第１調査

１）調査目的

青年期の自我発達上の危機状態[5]を調査し、性差や学年差が見られるかについて明らかにすることを目的とする。

２）調査方法

長尾（1986）が作成した「青年期の自我発達上の危機状態尺度（A 水準・B 水準）」[5−6]を用いて行った。

この尺度は、青年期の心の葛藤といった発達的危機内容に相当する A 水準（26項目）と、青年期の不適応といった適応的危機内容に相当する B 水準（24項目）から構成されている[5−6]。

表１－１　A水準（青年期の心の葛藤）

下位項目名	意味
決断力欠如	大切なことの決断ができない
同一性拡散	自分がどんな人間なのか特徴がつかめない
自己収縮	自信がない、存在感が乏しい
自己開示対象の欠如	心を開いて話せる相手がいない
実行力欠如	何かを行う実行力がない
親とのアンビバレント感情	感情的に親への甘えと独立の葛藤がある
親からの独立と依存のアンビバレンス	考え方の上で親の考えと自分の考えとに葛藤がある

表１－２　B水準（青年期の不適応）

下位項目名	意味
緊張とその状況の回避	イライラが強くその場を逃げ出したい気持ち
精神衰弱	うつ状態
身体的痛み	心因からくる頭痛、腰痛など
まれな体験や精神・身体的反応	食欲不振や神秘的体験
閉じこもり	不登校傾向、引きこもり傾向
身体的疲労感	心因性の疲労感
対人的過敏性	人の目を気にしやすい

A 水準の26項目はさらに、７つの因子に分けられている。この因子を危機状態尺度の下位項目とし、内容は表１－１の通りである。また、B 水準の24項目も、７つの因子に分けられる[5−6]。これも危機状態尺度の下位項目とし、内容は表１－２の通りである。

３）調査対象者と日時

調査対象者：大学４年生27名（男子13名、女子14名）、１年生33名（男子10名、女子23名）。

調査日時：平成23年６月　４年生、
　　平成23年７月　１年生。

４）調査手続

A 水準は５件法で行い、「全くその通りである」を５点、「全くそうでない」を１点とし得点化した。なお A 水準の26項目中７項目を逆転項目とし、危機状態が高まるほど合計値が高得点となるようにした[5−7]。

次に B 水準は３件法で行い、「はい」を３点、「わからない」を２点、「いいえ」を１点として得点化した。また、A 水準と同様に B 水準の24項目中７項目を逆転項目とし、危機状態が高まるほど合計値が高得点となるようにした[5−7]。

２．第２調査

１）調査目的

自己を象徴させる木を描かせ、その樹冠と幹の高さ及

び左右の幅[5]（空間的位置）を計測し、自我状態を見る。また、性差や学年差が見られるかについて明らかにすることを目的とする。

２）調査方法

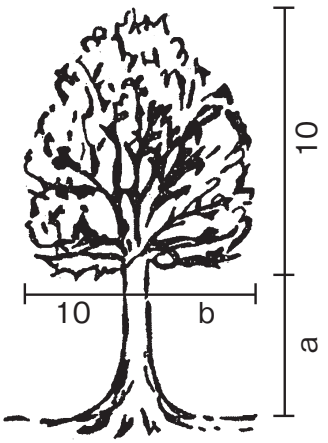
Koch, C.（1949）のバウムテストを用いて実施した。

調査対象者：第１調査と同一とした。

調査日時：第一調査の後にそれぞれ実施。

３）調査手続

第１調査の後に「一本の実のなる木を描いてください」[8]と教示し、B５の白画用紙に２B 鉛筆で木を描いてもらった。処理方法は、各木の樹冠と幹の高さ及び左右の幅を計測し、樹冠に対する幹の高さの比率（a 値）[5]と、樹冠の左半分に対する右半分の比率（b 値）[5]を算出した。（図１）[5]



$$a = \frac{\text{幹の高さ(mm)}}{\text{樹冠の高さ(mm)}} \times 10$$

$$b = \frac{\text{右の幅(mm)}}{\text{左の幅(mm)}} \times 10$$

図１　a 値と b 値

a 値は樹冠に対する幹の高さの比率を示し、この比率が高いものほど退行状態が捉えられると指摘している（Koch,　C. 1949）[5]。b 値は、樹冠の左半分に対する右半分の比率を示し、この比率が高いものほど依存傾向にあると考えられる。

４）分析方法

A 水準・B 水準とバウムテストとの関係性については、調査対象者を男女別・学年別に分類し、A 水準・A 水準の下位項目ごとの平均値と標準偏差及び、平均の差の検定（t 検定）を行った。

バウムテストも同様に男女別・学年別の a 値・b 値の平均値と標準偏差及び、平均の差の検定（t 検定）を行った。また、男女別・学年別の A 水準・B 水準と a 値・b 値の相関係数を算出した後、性差と学年差をみる平均の差や相関係数を求めた。

⑴　バウムテストとは

バウムテストは、投映法に分類されるパーソナリティ検査の一つである[8]。また、バウムテストが表すのは、被験者の無意識の自己像とされ被験者は、木を描くことを通して能動的に自分の存在をバウムに投入することができる。この自己像は、現実的な自己像であるだけでなく、被験者の理想像あるいは不安像であることもある[8]。また、重要な他者像を表していることもある。

⑵　形式分析

Koch,　C.（1949）は、バウムが被験者の自己像を表すのに対し、バウムの描かれた紙（画用紙）は被験者の生活空間を表しているとして、バウムが紙（画用紙）のどの空間に描かれたかという視点を解釈に適用できると考えた。例えば、用紙の左側に寄って描かれた木は、母親の影響や女性性が強く、他にも依存的、内向性、受動性、消極性、自閉的や過去などを示すとされている。そして、用紙の右側に寄って描かれた木は、父親の影響や男性性が強く、他にも自立性、外向性、積極性、社会性、未来などを示すとされている。[8−10]

また、描かれたバウムのサイズは、被験者の環境との関係を示していると考えられている。例えば大きすぎる木は、自己顕示、自己拡張、過活動、高揚した気分、攻撃性などを示すとされている。一方、小さすぎる木は、不安、低い自尊心、自己抑制、劣等感、抑うつ感、無力感、引きこもりなどを示し、時には抵抗した状態や依存性を示すとされている[8−10]。

そして、木の立体感や光の加減を表すために陰影が使われることがある。多くの研究者によると、例えば陰影が強すぎるあるいは、本来は存在しないところにある場合などは、不安や抑うつ感、外界からの影響に対して自己を保護しようとする機制、心的外傷となる記憶の抑圧、潜在敵意などを象徴するとしている[8−10]。

⑶　バウムの部分的な特徴と解釈

次に、バウムの形態を部分的な特徴から解釈する。バウムの部分的な特徴には、いくつかの意味が与えられているが、ここでは a 値、b 値と関係性のある「幹」と「樹冠」について取り上げる。

「幹」は樹木の中心となる部分である。解釈として、基本的な自我感情と心理的発達、生命力、精神エネルギー、内的衝動の流れなどがある。また、上に伸びていく姿から、下方が被験者の幼児期体験や無意識で、上方が現在や意識的な経験と解釈することもある[8]。

「樹冠」は葉や枝などによって形成される幹の上部である。解釈として、内的衝動や感情を統制する理性、目標・理想・趣味などとそれに関する自尊心や自己評価、人間関係への意識的態度などがある[8]。

⑷　青年期のバウム

描かれたバウムは、現実的な木であることもあれば、抽象的な木や空想的な木であることもある。青年や成人では、全体をできるだけ簡単に描こうとするために抽象的、図式的になることも多いが、抽象的なバウムの場合、

テストに対して防衛的で警戒や抵抗をしたり、自分の姿を現そうとしなかったり、現実からの逃避的態度や皮肉な見方で人生を送ろうとしている、あるいはユーモアのセンスがあるとされている。また実在しそうにない空想的なバウムは、精神的に幼稚すぎる、あるいは精神障害の可能性も考えられるとされている。[8−10)]

Ⅲ．結　　果

１．自我危機状態尺度の性差と学年差

各学年及び性別の危機状態尺度のＡ水準の総得点の平均値と標準偏差値は、１年生男子が75.80（7.78）、女子が79.41（12.02）、４年生男子が75.69（5.86）で、女子が84.71（13.43）となった（表２－１）。同じくＢ水準では１年生男子が44.00(5.92)、女子が45.82(8.64)、４年生男子が41.15（5.86）で女子が48.64（9.51）となった（表２－２）。

また、下位項目別にみた性差は４年生にみられ、Ａ水準では、「同一性拡散」が（t（25）＝−2.58, p＜.01）、「決断力欠如」が（t（25）＝−2.09, p＜.05)、「実行力欠如」が（t（25）＝−2.18, p＜.05）で女性が有意な高い値を示した。さらに学年別では「親からの独立と依存のアンビバレンス」で（t（58）＝2.04, p＜.05）（１年＜４年）となり有意な差がみられた。なお１年生の男女に関しては有意差が見られなかった（表３－１）。以上のことにより、Ａ水準では女性が「決断力欠如」、「同

表２－１　危機状態尺度Ａ水準の得点の平均値

	下位項目	平均値			
		１年生		４年生	
		男	女	男	女
Ａ水準	決断力欠如	13.10 (3.65)	15.32 (3.34)	13.31 (2.65)	15.71 (4.05)
	同一性拡散	8.60 (4.02)	9.14 (3.56)	8.38 (3.00)	8.14 (3.53)
	自己収縮	8.50 (1.84)	8.45 (2.53)	6.54 (2.21)	8.14 (1.16)
	自己開示対象の欠如	9.80 (1.36)	10.23 (2.39)	9.54 (2.25)	11.43 (2.85)
	実行力欠如	8.40 (1.54)	7.59 (2.14)	8.23 (2.40)	8.86 (3.19)
	親とのアンビバレント感情	11.20 (3.17)	13.36 (2.73)	15.15 (1.74)	15.29 (3.14)
	親からの独立と依存のアンビバレンス	75.80 (4.19)	79.41 (2.87)	75.69 (3.94)	84.71 (2.95)
	Ａ水準の総得点	75.80 (7.78)	79.41 (12.02)	75.69 (5.86)	84.71 (13.43)

（　）内は標準偏差値である

表２－２　危機状態尺度Ｂ水準の得点の平均値

	下位項目	平均値			
		１年生		４年生	
		男	女	男	女
Ｂ水準	緊張とその状況の回避	9.00 (2.48)	9.23 (3.65)	7.92 (2.15)	10.21 (4.15)
	精神衰弱	4.50 (1.99)	4.23 (2.02)	4.31 (2.53)	5.00 (1.87)
	身体的痛み	5.60 (1.27)	6.27 (1.55)	5.69 (1.38)	6.39 (1.10)
	まれな体験や精神・身体的反応	5.60 (1.43)	5.23 (1.82)	5.31 (1.50)	5.79 (2.41)
	閉じこもり	5.50 (0.81)	6.55 (1.33)	5.31 (1.92)	6.86 (1.33)
	身体的疲労感	3.60 (1.85)	4.14 (1.47)	3.69 (1.66)	4.57 (1.53)
	対人的過敏性	44.00 (1.33)	45.82 (1.27)	41.15 (1.33)	48.64 (1.10)
	Ｂ水準の総得点	44.00 (5.92)	45.82 (8.64)	41.15 (5.86)	48.64 (9.51)

（　）内は標準偏差値である

表２－３　バウムテストの自我発達の評定指標の平均値

評定指標		平均値			
		１年生		４年生	
		男	女	男	女
バウムテスト	a値（㎜）	7.24 (3.84)	6.87 (1.57)	11.40 (8.46)	5.98 (2.94)
	b値（㎜）	11.77 (1.67)	11.68 (4.76)	10.37 (3.20)	9.86 (4.46)

（　）内は標準偏差値である

一性拡散」、「実行力欠如」の状態であることがとらえられた。

B水準に関しては、「精神衰弱」が（t（25）＝－3.18, p＜.01）、「身体的疲労感」が（t(25)＝－3.34, p＜.01）、「対人的過敏性」が（t（25）＝－2.73, p＜.01）で女性が有意な高い値を示した（表３－２）。

更に、１年生でも「身体的疲労感」に（t（31）＝－1.89, p＜.05）女性が有意な高い値を示した。また学年では有意な差はみられなかった（表３－２）。以上のことより、B水準では女性が「精神衰弱」、「身体的疲労感」、「対人的過敏性」が男性よりも高い状態であることがとらえられた。

２．バウムテストの性差と学年差

各学年のバウムテストのa値の平均値と標準偏差値は１年生男子が7.24（3.84）、女子が6.87（1.57）、４年男子が11.40（8.46）で女子が5.98（2.94）となった。同じくb値では１年生男子が11.77（1.67）で女子が11.68（4.76）、４年生男子が10.37(3.20)で女子が9.86(4.46)となった（表２－３）。また、a値・b値を性差、学年別でみると、４年生のa値に関して性差がみられ、(t(15)＝2.36, p＜.05)男性が有意な高い値を示した。しかし、b値及び１年生男女によるa値・b値に関しては、有意な差はみられなかった（表３－３）。

表３－１　危機状態下位項目尺度Ａ水準の性差別・学年別の平均値の検定の比

	下位項目	大学１年 男：女	大学４年 男：女	大学１年：大学４年
A水準	決断力欠如		t＝－2.09 * 男＜女	
	同一性拡散		t＝－2.58 ** 男＜女	
	自己収縮			
	自己開示対象の欠如			
	実行力欠如		t＝－2.18 * 男＜女	
	親とのアンビバレント感情			
	親からの独立と依存のアンビバレンス			t=2.04 * １年＜４年

*p＜.05　**p＜.01

表３－２　危機状態下位項目尺度Ｂ水準の性差別・学年別の平均値の検定の比

	下位項目	大学１年 男：女	大学４年 男：女	大学１年：大学４年
B水準	緊張とその状況の回避			
	精神衰弱		t＝－3.18 ** 男＜女	
	身体的痛み			
	まれな体験や精神・身体的反応			
	閉じこもり			
	身体的疲労感	t＝－1.89 * 男＜女	t＝－3.34 ** 男＜女	
	対人的過敏性		t＝－2.73 ** 男＜女	

*p＜.05　**p＜.01

表３－３　バウムテストの性差別・学年別の平均値の検定の比

	評価指標	大学１年 男：女	大学４年 男：女	大学１年：大学４年
バウムテスト	a値（㎜）		t=2.36 * 男>女	
	b値（㎜）			

*p<.05　**p<.01

表４－１　危機状態下位項目尺度別にみた男女別・学年別の相関係数

水準	下位項目	１年男子				１年女子				４年男子				４年女子			
		a値	P	b値	P	a値	P	b値	P	a値	P	b値	P	a値	P	b値	P
A水準	決断力欠如	-.61	ns	.13	ns	.12	ns	.32	ns	.03	ns	-.15	ns	.3	ns	-.3	ns
	同一性拡散	.41	ns	-.57	ns	.14	ns	.32	ns	.09	ns	-.15	ns	.22	ns	-.11	ns
	自己収縮	.3	ns	.54	ns	-.08	ns	.05	ns	-.26	ns	.09	ns	.13	ns	-.33	ns
	自己開示対象の欠如	.42	ns	-.924	**	-.27	ns	.23	ns	.4	ns	-.13	ns	.3	ns	-.13	ns
	実行力欠如	-.17	ns	.25	ns	-.002	ns	.02	ns	.18	ns	.1	ns	.23	ns	-.07	ns
	親とのアンビバレント感情	.55	ns	-.2	ns	-.18	ns	-.2	ns	.33	ns	-.06	ns	.46	ns	.06	ns
	親からの独立と依存のアンビバンレンス	.53	ns	.21	ns	-.14	ns	.25	ns	.05	ns	.22	ns	.18	ns	.27	ns
B水準	緊張とその状況の回避	.5	ns	-.14	ns	.15	ns	.1	ns	.81	ns	-.2	ns	.42	ns	-.05	ns
	精神衰弱	.2	ns	-.649	*	-.07	ns	.34	ns	.12	ns	-.001	ns	.009	ns	-.2	ns
	身体的痛み	.3	ns	-.735	*	.3	ns	.19	ns	-.2	ns	.06	ns	.07	ns	-.5	ns
	まれな体験や精神・身体的反応	.06	ns	-.62	ns	-.04	ns	.05	ns	.2	ns	.1	ns	.24	ns	-.798	**
	閉じこもり	-.3	ns	.669	*	-.3	ns	.12	ns	.2	ns	-.42	ns	.21	ns	-.24	ns
	身体的疲労感	.6	ns	-.4	ns	-.1	ns	-.2	ns	.34	ns	-.14	ns	.13	ns	-.3	ns
	対人的過敏性	.39	ns	-.692	*	.24	ns	.3	ns	.3	ns	.3	ns	.03	ns	-.3	ns

*p<.05　**p<.01

３）A 水準・B 水準と a 値・b 値の相関関係

各学年及び男女の A 水準・B 水準と a 値・b 値との関係を見るために相関係数を算出した（表４－１）。

まず４年生男子では、有意な相関はみられなかった。また４年生女子では、「まれな体験や精神・身体的反応」と b 値に関して有意な負の相関がみられた（r=－.798, p<.01）。

次に、１年生男子では、b 値に関して、「自己開示対象の欠如」（r=－.924, p<.01）、「精神衰弱」（r=－.649, p<.05）、「身体的痛み」（r=－.735, p<.05）、「対人的過敏性」（r=－.692, p<.05）でそれぞれ有意な負の相関がみられた。また「閉じこもり」と b 値に関しては、有意な正の相関がみられた（r=.669, p<.05）。しかし、１年生女子に関しては、A 水準・B 水準と a 値・b 値の相関はみられなかった。

Ⅳ．考　　察

１．危機状態尺度における学年差について

大学１年生と４年生を比較すると、４年生の方が強く自我の危機状態を示しており、性差もみられた。これは、比較的将来の進路を決定する場面がまだ少ない１年生と決定を下すことを要求される場面が多い４年生との差が出たのではないかと考える。特に最近の経済状況を反映しての大学生の就職難ということもあり、そのことが進路決定にも影響を与えていると考える。このことについて、徳田（2008）は「学生生活を送る上で“困っていること・不安なこと”について調べたところ、学年が進むにつれて学業の問題で不安を感じる学生は次第に減少する一方、進路の問題で不安を感じる学生は増加した」[11]と報告している。さらに、自我が拡散状態である場合は、自己選択や自己決定ができないだけでなく、自分を見失い無気力状態に陥ることもある。このことについて鶴田（1998）は「中間期は、自分らしい学生生活を送る時期になり得ると同時にスランプや無気力になりやすい時期でもある」[12]と述べている。

また、「親からの独立と依存のアンビバレンス」でも、４年生の方が高いことから、学生から社会人へと移り変わり、自立していかなければならない反面、躊躇いや不安があるのではないかと考えられる。

そして、この「学年差」に関して、長尾（1992）は、「青年期の自我発達上の危機状態に関する中学生時、高

校生時､大学生時の学校段階差｣を明らかにする調査で、「青年期の自我発達上の危機状態は、中学生時と高校生時に高まり、大学生時には低減する」[5]と述べている。今回、大学１年生と４年生を比較した。１年生は高校から大学へと進学し、サークル活動やアルバイト、学業などの多様な活動を通して自己理解を深め、自分探しを行っていくが、４年生になると卒業を控えた就職活動などにより、再び心の葛藤や不安が高まり、危機的状況に陥っているのではないかと推測される。

２．危機状態尺度における性差について

大学４年生においては､｢決断力欠如｣､｢同一性拡散｣、「実行力欠如」において性差がみられ女子の方が高値であった。このことは、大学４年生女子は４年生男子に比べて決断や実行することに戸惑いがあり、自我同一性も拡散状態となりやすい傾向が示唆された。また、「精神衰弱｣、｢身体的疲労感｣、｢身体的疲労感」においても女子の方が高値であったことから、対人関係においても女子の方が人の目を気にしやすく、精神的あるいは身体においても疲労を感じているのではないかと予想される。

３．危機状態尺度とバウムの関係性について

まず、危機状態尺度とバウムテストの関係をみると、「１年生男子」に「自己開示対象の欠如」とｂ値に関して有意な負の相関がみられた。このことは、心を開いて話せる友達がいないが、他者にも頼れない（他者への依存の低下の）ために孤立傾向が見られると捉えられる。調査の時期が入学２ヶ月後であり、学校生活においての友人関係がまだ十分取れないことも要因としてあるのではないかと考えられる。また、「精神衰弱」と「身体的痛み｣、｢対人的過敏性」とに関してもｂ値とに負の相関がみられた。このことから、対人関係の中で信頼できる友達がいないこともあって、対人関係を上手くとることができず、身体症状などの身体化が生じやすくなっているのではないかと捉えられる。さらに、「閉じこもり」とｂ値に正の相関がみられた。このことから、自分に自信がなく、自己を出せずに閉じこもっている者は、孤立傾向が高く、不適応を起こしやすくなっているとも推測される。このように、危機状態尺度やバウムテストのそれぞれの結果を単独でみると、心身の危険なサインとして学年差や性差が表れにくかった１年生男子でも、二つを合わせて関係性をみることで、危機状態が表出されることが確認できた。つまり質問紙だけでは自己についての意識化が希薄であっても、バウムを描くことでより自己が投影されやすくなり、深い内面の状態にある自己までもが推測しやすくなるという可能性が示唆される。

また、４年生女子に関して「まれな体験や精神・身体的反応」とｂ値に有意な負の相関がみられた。このことは、依存しない人は自分の世界に閉じこもるのではないかと考えられる。つまり４年生の女子は、誰かに頼るのではなく、一人で不安などを抱え込む傾向から、不眠や食欲不振といった精神的・身体的な症状が現れやすくなっていると思われる。また、危機状態尺度における性差でも４年生男子より、「精神衰弱｣、｢身体的疲労感｣、「対人的過敏性」の項目が高く、精神的・身体的にも疲労を感じており、また人の目を気にしやすいなどの特徴がみられた。このことについて、堀井（2002）は「青年期における対人不安意識の発達的変化」[13]の研究において、「＜自分や他人が気になる＞悩みで、女子が有意に高い」ことを述べている。この性差について、「女子は従順で受け身的な役割をとることが社会的に期待されている（伊藤，1989)」[14]や「女子は他者に自らが受け入れられるかどうかといったことや、他者からどのように見られ、評価されるかといったことに過敏になりやすい性質を持つ（堀井，2002)」[13]としている。このことから、就職を意識した４年生女子は、他者から評価されることや社会へ出ることへの不安から、精神的なストレスや疲労感へと繋がり、身体症状として現れているのではないかと考えられる。

一方、４年生男子は、危機状態尺度において４年生女子よりも低いという結果が出た。そしてバウムテストのａ値は、４年生男子の方が女子よりも高いという結果が出た。つまり樹冠よりも幹が高いことが分かり、そのことは４年生男子は女子よりも自我が未熟であり、自分のことをしっかり捉えられない幼さがあるのではないかと示唆される。このことから、４年生女子は形成の過程で男子よりも危機的状況に対して意識化しやすくあり、４年生男子は危機的状況に対して意識化が弱く、現実を直面化できずにいるとも捉えることができるのではないだろうか。

４．おわりに

大学生の自我状態の特徴として、危機尺度における学年差では１年生よりも４年生の方が危機状態が高いことが分かった。その中でも、４年生女子においては、決断力や実行力が欠如しており、精神及び身体的に疲労を感じている特徴がみられた。しかし、「閉じこもり」や｢自己開示対象の欠如」には、有意差が見られなかったことから、交友関係については葛藤や不適応が少ないことが分かった。このことについて長尾（2005）も、「中学・高校生時の危機状態は、親子関係上や交友関係上という対人関係次元での問題として現れやすいが、大学生ともなると自分を自分で問い直すという対自的次元の危機状態となりやすい」[5]と述べている。つまり、将来的な決断を迫られている時期に、これまでの自分の生き方を見直し、これからの自分の生き方をどのようにするのか、

社会集団へ自分はいったい何ができるのかといった不安を抱えている特徴が考えられる。

一方１年生は、「閉じこもり」や「自己開示対象の欠如」に関して、バウムテストとの相関がみられたことから、交友関係に不安や葛藤がみられる特徴が分かった。それは大学に入学したばかりで、まだ自我を出せない、あるいは心を開いて話せる友人がいないことで、孤立感を心の奥底で感じていると考えられる。また対人関係においても過敏になりやすく精神的・身体的に痛みを伴いやすいと思われる。このように、青年期の中でもその置かれている状況や環境によって、危機状態の内容が異なっており、それらを段階的に乗り越えることにより、自我同一性を確立していくことができると考える。さらにバウムテストを同時に調査に取り入れることで、意識化されていない青年期の自我状態の特性把握に有効であることが示唆された。

Ⅴ．参考・引用文献

１）伊藤良子：臨床心理学－全体的存在として人間を理解する－ミネルヴァ書房，156-160（2009）

２）青木紀久代, 神宮英夫：徹底図解心理学　新星出版, 104-105（2010）

３）下山晴彦編：よくわかる臨床心理学／訂正新版ミネルヴァ書房，106-107（2009）

４）青木省三：僕のこころを病名で呼ばないで－思春期外来から見えるもの－，岩波書店（2005）

５）長尾博：青年期の自我発達上の危機状態に関する研究　ナカニシヤ出版，２，６-９，19-46，51-78（2005）

６）堀洋道監修／山本眞理子編：心理測定尺度集ＩＩ人間の内面を探る＜自己・内過程＞サイエンス社，101-08（2001）

７）小塩真司，西口利文：心理学基礎演習 Vol. 2 質問紙調査の手順ナカニシヤ出版，57-58（2007）

８）願興寺礼子，吉住隆弘編：心理学基礎演習 Vol. 5 心理検査の実施の初歩，ナカニシヤ出版，68-74（2011）

９）Karen　Bolander，高橋依子：樹木画によるパーソナリティの理解ナカニシヤ出版，85-96（1999）

10）一谷彊，林勝造，国吉政一：バウムテストの基礎的研究風間書房，114-115（1995）

11）徳田完二：学生期ライフサイクルから見た職業決定プロセスの諸側面，立命館人間科学研究，17，１-14（2008）

12）鶴田和美：下位時期から見た学生期．大学教育における新しい学生相談像の形成に関する研究（平成９年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書），59-70（1998）

13）堀井俊章：青年期における対人不安意識の発達的変化，山形大学紀要（教育科学）第13巻，第１号（2002）

14）伊藤裕子：性役割の評価に関する研究，教育心理学研究，26，１-11（1978）